

学校は近年、次から次へと新しいことに取り組んでいる。スクラップアンドビルドという言葉がある。何かスクラップされて新たなことが入ってきてビルドならばわかるが、実状はビルドアンドビルドである。何も減ることなくどんどん増えていく一方である。多忙化に拍車がかかるのも無理はない。

昔から不思議に思っていることがある。現代ではパソコンが普及し、手書き、ワープロの時代に比べれば格段に事務処理がスピードアップできているはずである。コピー機の性能も目を見張るものがある。便利な世の中である。ついていくのが精一杯である。

にもかかわらず、一向に余裕というものが生まれない。本来は、もっと余裕ができてゆったりと生徒たちと向き合う時間が生まれるはずであった。おかしい。便利なはずなのに時間が生まれず、気がつけば、パソコンに向かっている時間が長い。

どうしてこうなってしまったのだろうか。時代の変化に伴って、学校教育に対する“注文”がどんどん多くなっていった。教育とは、国家百年の計である。国の未来を考えると、教育すなわち学校の使命には大きいものがある。

さすがに、教員の多忙化が問題となり、様々な動きが始まった。県立高校では、今年度から2つの大きなシステムが稼働し始めた。「校務支援システム」と「勤怠管理システム」である。

校務支援システムは、今まで手作業で行ってきたことや先生方が各自で行ってきたものが一括管理され、様々なデータが共有かつ連動するようになる。構築されれば画期的なシステムとなる。学校にもようやく入ってきたかという感がある。ただし、構築するまでは意外と大変な作業があるところがポイントである。今年度は、システム構築へ向けての1年となる。

勤怠管理システムは、民間企業などでは既に導入されているものだと思う。タイムカードのパソコン版のようなものである。先生方は、出勤と退勤のときに自分のカードを専用パソコンにかざすだけで時刻が打ち込まれるようになっている。加えて、月ごとの総勤務時間などが瞬時に出てくる。健康管理にも一役買うことになる。出張などの際には、自分のスマホからも時刻を打ち込むことができるという優れものである。

どちらも急に導入された感のあるシステムだが、本校の先生方はさほど苦もなくシステムとお付き合いをしている。その陰には、これらのシステム導入並びに運営にあたり活躍してくれている先生方の存在がある。新しいことを進めるには、その先導役が必要である。表現を変えれば校内のヘルプデスク、サポートデスクである。ありがたい。

これらのシステムは、多忙化解消につながるものである。そうでなければならない。今度こそそうしなければならない。校務支援システムが本格稼働し、軌道に乗った暁には、学校という職場がどのように変わるのだろうか。楽しみである。

一方、勤怠管理システムだが、何か味気ないと感じるのは私だけだろうか。私が教員になった頃は、「出勤札」というものが校長室にあった。朝、出勤すると、校長室に入り自分の出勤札を返すのである。そして、退勤するときや出張にでかけるときに、また返す。

校長室に校長先生がいらっしやると、多少緊張したものである。でも、声をかけていただけのがうれしかったのも事実である。出張に出かける際には、札を返して「これから〇〇まで〇〇の出張に行つてまいります」と校長先生に挨拶をしたものである。すると、何かしら声をかけていただいた。出張から戻ってきたときにも「ただいま〇〇の出張から戻つてまいりました」と挨拶をする。そして、また声をかけていただく。校長先生は出勤札を見れば、どの先生が今学校にいないのかが一目瞭然だった。

昔のことではあるが、この人と人がつながった“システム”により、多くのことを学んだ気がする。勤怠管理システムではパソコンに朝なら「高澤正男さん、おはようございます」帰りなら「高澤正男さん、お疲れ様でした」と表示される。だが、話しかけてはくれない。それでもちょっとうれしい。機械化されたシステムは便利ではある。だが、出勤札に教わったことも忘れないようにしていきたい。